

<b>Title</b>	同情する苦しみ、また不正義との対決としての十字架（東日本大震災国際神学シンポジウム）
<b>Author(s)</b>	Glen, Stassen 河野, 克也・訳
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, -No.54, 2013.2 : 86-115
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4735">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4735</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 同情する苦しみ、また不正義との対決としての十字架

グレン・スタツセン

河野 克也・訳

福島第一原子力発電所周辺地域の方々は、多大な苦しみを経験した。そして、その苦しみは今なお続いている。私たちも皆、その方々とともに、その苦しみを経験している。私たちはまた、回復のために祈る。ホアン・マルティネスと私が来たのも、まさに私たちの同情 (compassion) を表明し、また絆 (connection) を結ぶためである。

私たちの福音は、私たちのために多大な苦しみを引き受けてくださったイエス・キリストについての福音である。そこで私は、福島の方々を念頭に置きながら、マルコ福音書が語っていることに注目することで、イエス・キリストの苦しみについてさらに深く学ぶことができるのではないかと、問いかけてみたい。<sup>①</sup>

十字架上のイエスの苦しみの意味については、もちろん過去二〇世紀の間に多くの解釈がなされてきた。しかしそれらの解釈は、諸福音書そのものからではなく別のところから持ってきたメタファーを使っているという理由で、批判されている。<sup>②</sup>マルコ福音書が十字架を解釈するその解釈に、注意深く耳を傾けていただきたい。同様に、北森嘉蔵は『神の痛みの神学』において、エレミヤ書三一・二〇とイザヤ書六二・一五に注意深く耳を傾けた。私は彼の解釈を大いに尊敬しており、この六五年前の日本の解釈から残りの世界が学ぶべきことについて、賛辞を呈したいと思う。北森がエ

レミヤ書に焦点を合わせたように、私はマルコ福音書に焦点を合わせることにしよう。そうすることで私たちは、福島第一原発のメルトダウンと放射能汚染に苦しんでいる方々を支援しようとするこの時に、私たち自身の神学を深めることができるかと期待するからである。

### マルコ福音書——同情と対決をもって存在に介入すること

「神の子」と聖霊の働きとは、マルコ福音書全体を通して、イエスがだれであるかを理解する鍵となっている<sup>(3)</sup>。マルコ福音書は、その最初の節から、イエスについて受肉論的に語り、イエスが神の子であり、イエスにおいてまたイエスを通して聖霊が行動していると告げる。「神の子イエス・キリストの福音」であり、このお方の上に聖霊が鳩のように降り、このお方について天からの声が「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と宣言する（マルコ一・一〇—一一）。

イエスがなさることにおいて、私たちは神が行動しておられるのを見る。イエス・キリストにおいて神は現臨し、私たちの生のただ中に受肉論的に介入して、私たちの疎外や不正義、敵意を、神御自身の中に引き受けてくださる。マルコ福音書において、神は苦しみのただ中に同情的に入ってください、同様に恥と罪責の経験の中にも入ってください。神は、キリストにおいて、現在苦しんでいる方々の経験の中にも、同情的に入ってくださいるのである。

マルコ福音書の冒頭から、洗礼者ヨハネとイエスは共に、預言者イザヤが預言した通り神の支配が近づき、また神の霊がイエスにおいて行動していることを告げる<sup>(4)</sup>。一二節において、誘惑されるためにイエスを荒れ野に送り出しているのは、聖霊なのである。

続いて、一四節では、洗礼者ヨハネが逮捕される。ヨハネの逮捕は、イエス自身の逮捕を予告する。マルコ福音書は、開始早々、イエスの十字架上の死を考え、その意味を解釈しているのである。

すぐ続いて二二節では、イエスはガリラヤにおいて権威をもつて教え、同情をもつて癒しを行う。カファルナウム周辺におけるイエスの疾風のごときミニストリーは、教えと癒しの九つのエピソードを含んでいる。このカファルナウム周辺の旅の開始は、三つの仕方ではイエスの逮捕と十字架をあらかじめ説明している。すなわち、洗礼者ヨハネは逮捕されており、私たちはヨハネが首をはねられることになることと知っている。ファリサイ派とヘロデ派の人々は共謀して、イエスの抹殺を画策する。そして、エルサレムの政治的宗教的支配層は、彼らの告発人をすでに派遣している。さらにこの部分は、イエスが後にエルサレムへ、そして自らの十字架刑へと進み行く動機づけを、三つの仕方であらかじめ説明している。すなわち、イエスはイザヤの預言した神の支配を宣言している。イエスのなさっていることの内に聖霊がおられる。そして、イエスは、解放を必要とする人たちのために、同情をもつて行動している。マルコ福音書は、イエスの教えと、解放を必要とする人々への同情とを指し示すことで、十字架を説明するのである。福音とは、癒しと解放を必要とする人々に対するイエスの同情であり、イエスのうちに見られる神の同情である。そしてこの同情は、間違いなく放射能汚染地域の人々に対する同情と解放を含んでいる。

#### カファルナウム区分（一・二一―三・一二）

この部分は、直訳すると「そして彼らはカファルナウムの中に入つて、いった（enter into）」という言葉で始まる。この中に入るといふテーマは、この区分全体を通して、重要な仕方では響き渡っている。神は――神の霊において、神の御

子において、イエスにおいて——、ドラマティックな仕方、人々の生の中に入ってください。それは特に、支配の制度や、あるいは自分自身の恥によって閉め出されて、(closed out) しまっている人々である。あるいは、それ以外の理由で苦しんでいる人々についてもあてはまる。ギリシア語では、動詞エルコマイ(入る、面前に来る、居るという意味)は、接頭辞を伴うものも含めると、この区分に二九回出てくる。(ヨハネ福音書では、この動詞は受肉を指して使われる——神は、イエスにおいて地に来られ、イエスにおいて私たちの間に入られる。)<sup>(5)</sup> この動詞は、マルコ福音書において、際立つた塊となつて出てくる。それはまさに、イエスが同情をもつて、癒しと赦しを必要とする人々の生の中に入つてくださるといふことのしるし(markers)なのである。

カファルナウム区分の最初の節(二二二)は、同じく「入る」という意味の別の動詞(エイスポレウオマイ)をもつて、このテーマを宣言する。第一のエピソードでは、汚れた霊が、「我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ」と語る。言い換えれば、イエスがなさっていることにおいて、神が活動しておられるのである。第二のエピソードでは、イエスはシモンとアンデレの家の中に入られる。そこでイエスは、シモンのしゅうとめをお癒しになる。彼女のもとにやつて来て、その手を取つて起こし、しっかりと同情をもつて触れる。それは、病を持った彼女の世界のただ中に入るドラマティックな形式である。第三のエピソードでは、人々がイエスのもとに病人を連れて来て(人々がイエスの面前に来ることを示す、もう一つ別の動詞)、イエスは彼らをお癒しになる。第四場面では、重い皮膚病の人が、イエスのもとに来て懇願し、ひざまずいて次のように言う。「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」。そしてイエスは、同情の思いに満たされる(二二四)。

この福音書において、この後イエスは、人々の飢えや癒しの必要に対する同情に動かされている(六三三、四、八二、九二二、一〇四七—四八、参照五二一九)。この同情は、人々の苦しみに参与し、彼らと共に苦しみ、彼らの痛みの場、癒しの必要のただ中に入り、彼らに触れるということである。このテーマは、イエスが最も好んでいた

預言者イザヤが強調したものである（イザヤ一三・一八、一四・一、二七・一一、三〇・一八、四三・四、四九・一〇、一三、一五、五四・七、八、一〇、五五・七、六〇・一〇、六三・七、一五）。イザヤが教えたのと同じくイエスは、神こそ「同情する方／憐れみ深い方」(the Compassionate One)であり、私たちのもとに来て現臨してください。私たちを解放してくださいる方であると教えた。権力者たちや権威者たちは、だれが癒されるべきかを自分たちでコントロールしたかったために、イエスの行動に対して怒りを抱いたが、イエスは彼らの怒りを物ともしないで、同情をもつて人々の生のただ中に入つて行かれた。

イエスは、重い皮膚病の人に触れ、ドラマティックな仕方で彼の排除された生の中に入り、彼を物理的な共同体の中に歓迎した。それはちょうど、病んでいた女性の手を取って彼女を起き上がらせたのと同じである。イエスは繰り返して、見捨てられていた者たちの恥を癒し、彼らを共同体のメンバーにするように行動されたのである。<sup>(6)</sup>

権威者たちの排除のイデオロギーのゆえに、イエスは皮膚病の男に対して、イエスが彼を清いと宣言したことをだれにも何も言わないようにと厳しく警告し、ただ自分の体を祭司に見せて、清いと宣言してもらうために所定の儀式を経るようにお命じになった。「しかし、彼はそこを立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた。それで、イエスはもはや公然と町に入ることができず、町の外の人のいない所におられた」(マルコ一・四五)。イエスは、支配的権威者たちの支配への決意に反して、同情をもつて行動されていたために、すでに彼らの怒りを買っていたのである。

第五場面は、印象的な存在への介入 (entry into presence) である。四人の男が中風の男をイエスのもとに連れて来たが、その家は既に人でいっぱい、入ることができなかった。そこで彼らは屋根の一部を剥がして、その男をイエスの現前に降ろした。イエスは中風の人に「子よ」と呼びかけて、象徴的な仕方で彼を御自身の家族の一員とした。そしてイエスは、彼の罪の赦しを宣言する。律法学者たちは、神お一人だけが罪を赦すことができると言つて(彼らは、だ

れが神に罪を赦されるかをコントロールしようとしていた<sup>(7)</sup>、イエスが神を冒瀆していると責めた。冒瀆とは、イエスが死刑判決を受けることになるのと同じ告発である(マルコ一四・六四)。そこでイエスは、「人の子が地上で罪を赦す権威を持っている」ということをお示しになり、この人を癒された。

第六場面では、イエスは徴税人のレビをご覧になる。徴税人とは、ファリサイ派の人々の目には見捨てられた者と映っている人々である。イエスは、レビに対して従う者となるように招き、彼の家に入って、レビだけでなく他の徴税人や罪人たちとも、食事を共にするという親密な交わりを実践された。これこそまさに、見捨てられた者の存在への介入 (entry into the presence of outcasts) である。「わたしが来た、(ここでもエルコマイ)のは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」(二：一七)。

第七場面では、彼らがイエスのもとにや、つて来て、なぜイエスの弟子たちは断食をしないのかと尋ねている。イエスの答えは、御自身の存在について語る。「花婿が一緒にいるかぎり、断食はできない。しかし、花婿が奪い取られる時が来る」(二：一九b—二〇a)——ここでもまた、十字架が予告される。

第八場面では、イエスは、ダビデが従者たちの飢えを満たすために、神の家の中に入、つて、彼らに「御前の、供えのパン、」(the bread of the Presence) を食べさせたことについて語っている(二：二五—二六)。それは、飢えている人々、必要を抱えている人々に対して、神が彼らのところに存在しておられるということである。

第九場面では、イエスは会堂にお入りになり、手の萎えた人をお癒しになる(三：一—五)。

これとは対照的に、二：六と二：一六の律法学者たちと、二：二四と三：六のファリサイ派の人々とは、入ること、も、や、つて来る、こともしない。彼らは——離れた距離から (from a detached distance) ——決して同情することなく、座して、観察し、イエスのなさることについて議論しているのである。マルコは、しばしば敵対的な関係を空間的に引き離すことや、対峙して立つ様子によって描写する——エルコマイの対立概念である<sup>(8)</sup>。

マルコ福音書の最初の区分において、以下の四つのテーマが明らかになる。(1) イエスは、見捨てられている人々、癒しを必要としている人々、赦しを必要としている人々、食べ物を必要としている人々、また触れただき共同体の中に歓迎されることを必要としている人々の存在の中に入り、行かれる。(2) イエスは彼らに触れて、彼らを赦し、彼らと共に食事をし、彼らを見捨てられた立場から共同体の中へと解放される。(3) イエスはこのことを、同情／憐れみ (compassion) と、必要に対する感受性 (sensitivity to need) とから行っておられる。そして、(4) この同情と解放とにおいて、私たちは、神の霊、神の子が彼らを神の臨在 (presence) の中に招き入れて、分離と疎外を克服するという、神の御子の御性質 (character) を見るのである。この区分は、汚れた霊が「あなたは」神の聖者だ」(一・二四)と宣言することをもって始まり、霊どもがイエスの足下にひれ伏して「あなたは神の子だ」(三・一一)と言う場面で頂点に達する。皆さんが一致して、放射能汚染に苦しむ人々の必要を満たすために行動するとき、皆さんは神のしておられることに参与しているのである。

私は、イエスがただ単に人々の必要を満たすために行動していた、ということと言っているのではない。むしろ、自分自身の恥(「の意識」)のゆえに、あるいは見捨てられた立場のゆえに、神の臨在から排除されていると感じている人々の生の中に、イエスは神をもたらし神の霊をもたらし、ということである。イエスにおいて、神は防壁を突き抜けて人々の生の中に入り込んでくださるので、その人々はもはや、神からも他の人々からも、引き離されることがないのである。イエスは、権力者や権威者たちの排除のルールに従うことを拒絶している。その結果、「ファリサイ派の人々は出て行き、早速、ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた」(三二・六)。

彼らは、イエスがこのことをサタンの力で行っていると言って非難した。イエスは彼らに対して、うっかりすると見逃してしまいそうなアイロニーをもって反論する(三二・二一-三〇)。すなわち、聖霊の力をサタンの力呼ばわりすること、彼らこそが神を冒瀆しているのだと。必要を抱えた人々の中に入り、見捨てられた人々を共同体へと迎え入れ



る聖霊の臨在を、彼らは退けているのである。イエスは言う。「しかし、聖霊を冒瀆する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う」(三二・二九)。マルコ福音書全体を通して、イエスは権力者たちに対して、悔い改めて聖霊の臨在を認め、神の道に立ち返るようにと招いている。

マルコは、なぜイエスが十字架に架けられたのかを語ることで、その福音書を書き始めている。イエスは、同情をもつて見捨てられた人々の存在の中に入り、その人々を解放し、彼らを御自身また他の人々と共に共同体へと迎え入れたのであり、この同情的な解放行為においてこそ、イエスは神の子であり、聖霊としての神の臨在の道具なのである。イエスは、これら全ての人々を汚れた見捨てられた者として不当に、聖霊としての神の臨在の道具なのである。イエスは、これら全ての人々を汚れた見捨てられた者として不当に、聖霊としての神の臨在の道具なのである。イエスは、これら全ての人々を汚れた見捨てられた者として不当に、聖霊としての神の臨在の道具なのである。イエスは、これら全ての人々を汚れた見捨てられた者として不当に、聖霊としての神の臨在の道具なのである。

私たちが神から引き離されることは、私たちの罪責感ばかりではなく、私たちの恥によっても引き起こされるのだと、私は主張したい。私たちは恥じ入って、それぞれのいちじくの葉という防御によって神から隠れる。贖いのためには、赦しだけでなく、私たちが隠れている所、私たち自身が恥じ入っている場所に、神が私たちと共に、神御自身の苦しみをもつて入って来てくださることが必要である。これこそ、神がキリストにおいてしてくださっていることなのである。

### 悪魔的力、ヤイロの力、イエスの力(五二・一―四三)

マルコ福音書の五章において、会堂長の一人がイエスのもとにやつて来て、(エルコマイ)、その足下にひれ伏した<sup>9</sup>。

彼はイエスに、死の縁にある一二歳になる自分の娘を癒してくださいるように懇願した。彼は、娘に触れてくださるようにとイエスに懇願したのである。「……手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう」(二三節)。

ところがここで、何の社会的地位もなく、多大な恥を負った一人の人物によって事態は中断される。一二年間も出血に苦しんでいたこの女性は、祭儀的汚れのうちにあり、おそらくその汚れの臭いもしていたであろう。その出血のゆえに、彼女には夫がなかったと考えられる上、男性の支配する社会において、力のないものであった。手持ちの金すべてを費やして多くの医者にかかったものの、その医者たちに金を取られた挙げ句、ますます悪くなるばかりであった。彼女は祭儀的汚れの状態にあり、夫がなく、お金もなく、男性の支配する社会にあつて、痛々しいまでに恥を負っていた。その彼女が助けを求めたイエスには、死の縁にある娘を抱えた重要人物のためにしなければならぬ、より差し迫った用事があつたのである。<sup>(10)</sup>祭儀的汚れの状態にあることで、この女性は群衆の中にやって来るべきではないし、だれにも触れるべきではなかった。しかし彼女は、勇気を出して群衆の中へとやって来て、(エルコマイ)、イエスの衣に触れた(イエスの臨在の中へのドラマティックな進入である)。彼女は、「この方の服にでも触れればいやしていただける」と信じていた(二八節)。清浄規定に違反したといつて彼女を恥ずかしめる者は、だれかいただろうか。だれもいなかった。「すると、すぐ出血が全く止まつて病気がいやされたことを体感じた」(二九節)。

イエスは、「わたしの服に触れたのはだれか」とお尋ねになつた。この女性は「恐ろしくなり、震えながら進み出て(エルコマイ)ひれ伏し、すべてをありのまま話した。イエスは言われた。『娘よ、あなたの信仰があなたを救つた。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らさなさい』」(三三―三四節)。イエスは、この女性に対して「娘よ」と呼びかけることで、彼女を、見捨てられた者としてではなく、しっかりと共同体に包摂された、イエス御自身の家族の一員として扱っているのである。イエスは彼女の信仰を賞賛している。そして、「もうその病気にかからず、

元気に暮らしなさい」と語った〔英文新改訂標準訳NRSVでは「平和のうちにいき、癒されなさい」〕。

そしてついに、イエスはヤイロの娘のもとに出かけて行く。マルコは、娘が寝かされている家にイエスが入られたことを、三回繰り返して語っている。まずエルコマイを使って二回、続いて、カファルナウム区分を開始した一・二一で使ったのと同じ用語、エイスポレウオマイを使って。そしてここで、イエスは四回目になだかに触れている。イエスは、彼女の手を取って、起き上がるように呼びかけた。そこでイエスは、同情を示される。イエスは彼女が空腹であることを察して、彼らに向かつて、「食べ物少女に与えるように」と告げられた（四三節）。

## エルサレム入城（一・一一一—一三三）

イエスが人々の生のただ中に入られた出来事が集中する三番目の箇所は、一章にあるが、それはエルサレムおよび神殿——すなわち、ユダヤの政治的宗教的権力の中心——への「勝利の入城」の場面である。イエスは、軍馬にはなく、ろばに乗られた。私たちが棕櫚の主日として祝っているこの出来事は、ゼカリヤ書九・九—一〇を成就する、平和のメシアとしてのイエスの入城として教えられるべきである。

娘シオンよ、大いに踊れ。

娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。

見よ、あなたの王が来る。

彼は神に従い、勝利を与えられた者

高ぶることなく、ろばに乗って来る

雌ろばの子であるろばに乗って。

〔彼〕はエフライムから戦車を、〔NRSV〕新共同訳では「わたし」

エルサレムから軍馬を絶つ。

戦いの弓は絶たれ

諸国の民に平和が告げられる。……

イエスは、御自身がエルサレムの権力と権威者たちの存在のただ中に入り、平和のメシアとして、非暴力によって彼らに立ち向かうことを宣言しておられるのである。

ここでもまた、物語は、「入って行く」という用語をもって始められる。それは、カファルナウムのエピソードを開始したあの言葉、そして勇気を振り絞った女性とヤイロの娘の癒しを特徴づけたあの言葉である（エイスポレウオマイ）。人々は叫んで言った。『ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。我らの父ダビデの来べき国に、祝福があるように。……』こうして、イエスはエルサレム〔の中〕に〔入り〕(entered into)、神殿の境内〔の中〕に〔入り〕入られた(マルコ一一九一一節)〔NRSVに合わせて調整〕新共同訳では「エルサレムに着き」〕。ここでも、入るといふ動詞が出てくる——三回も。人々がこの出来事を、イエスのエルサレム入城(entry)と呼び慣わしてきた洞察は正しい。エルサレムに入られると、イエスはすぐに権力の中心である神殿に入られ、すべてのものを見て回られた(一一節)。イエスが権力の中心であるエルサレム、また神殿に入られたのは、権力に立ち向かい、悔い改めへと招くためであったということは、ここではこれ以上ないほどに明らかである。<sup>(1)</sup>

「それから、〔イエスは〕エルサレムに來た。イエスは神殿の境内に入り、(エルコマイとエイスポレウオマイ)、そこ

で売り買いをしていた人々を追い払い始め」られた(一五節)〔NRSVに合わせて調整…新共同訳では「一行は」〕。タエ・ホー・リーは、イエスが貪欲な両替人を神殿から追い出した宮清め(一一・一五―一九)という預言者の象徴行為の諸解釈を、注意深く評価している。リーは以下のように結論づける。

イエスが神殿に対して象徴的預言行為を実行したのは、神殿による預言者の正義に対する違反と、その宗教的隠蔽のゆえであった。当時の「生活の座」としては、抑圧的で搾取的な社会経済的制度があり、過重な課税、負債を生み出す什一税(十分の一税)、また腐敗した大祭司たちと、彼らが神殿の運営によって得ていた不正な経済的利益があった。それゆえ、その反動として、大衆の預言者のメシア的抗議運動があった。神殿におけるイエスの四つの行動は、イエスが預言者の正義の主題に基づいて、神殿制度の不正義を批判したことを示している。イエスが引用したイザヤ五六・七とエレミヤ七・一一には、預言者の正義という共通する主題がある。それは、ミシュパト〔裁き…口語訳では公義〕とツエダカー〔正義〕である。過越祭の時期は、契約と解放と正義の時期である。イエスの十字架へと至る触媒的出来事であったと、多くの学者が考えている、この預言者の行為は、権威者たちの不正義に対する終末論的裁きの行為であった。正義は、イエスにとつて、決して小さな幅次の主題ではない。それは、権威者たちを悔い改めへと導くか、それとも彼らがイエスの十字架刑を求めるようになるか、そのどちらかをもたらす対決行為であった。<sup>(12)</sup>

イエスは、権威者たちの不正義によって苦しんでいる人々への同情(compassion)のゆえに、彼らの不正義と対決したのである。〔イエスの十字架〕こそが、永遠に記憶されるほどにドラマティックな仕方、彼らの不正義と対決する唯一の非暴力的な方法であった。それによって、イエスの十字架は、数多くの十字架刑や、あるいはさほどドラマ

ティックではない仕方です。苦しむ人々に対する同情のゆえに、イエスがすべての不正義と対決してくださった出来事として記憶されるのである。イエスは、彼らに悔い改めるように呼びかけるために、彼らの不正義のただ中に入ってくださいました。それはまた、不正義に苦しむ人々に対する私たちの同情のゆえに、私たち自身が不正義と対決するようにと呼びかけるためでもあった。

マルコ一二・六では、イエスのたとえの中で、ぶどう園の農夫たちが、権力と富への欲望のために、共謀して主人の息子を殺すという出来事が語られている。「祭司長、律法学者、長老たち」(一二・二七)は、「イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づいたので、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた」(一二・一二)。ここでもまた、マルコは、イエスが権威者たちの不正義、権力、支配、そして富への欲望と対決したために、権威者たちがイエスを殺そうと共謀したことを告げている。このたとえを話すことによって、イエスは権威者たちがしていること、ただ中へと入り、彼らと対峙し、彼らが悔い改めるべき罪を名指しされた。イエスは、弟子たちに悔い改めるように呼びかけているのと同様に、権威者たちに対しても、その支配と欲望、偽善を悔い改めるようにと呼びかけているのである(一二・一一五、一二四、三三四、三八―四〇、一三二、九、三五―三六)。イエスは、権力者たちをも贖うことを求めておられる——もしも彼らが悔い改めるならば、であるが。

続いて一二・一四と一二・一八では、ファリサイ派、ヘロデ派、サドカイ派の人々が、イエスの存在の中に入って(エルコマイ)、イエスと論争や対話をしている。それは、律法学者の一人がイエスのもとに近づいて来て(プロセルソーン、プロセルコマイのアオリスト形)、イエスが立派にお答えになったことを認め、第一の掟は何かと尋ねる場面で頂点に至る。イエスは、二重の愛の掟によってお答えになる。この律法学者はそれに応答して、イエスの答えと預言者の教えの両方を肯定する。「先生、おっしゃるとおりです。……おっしゃったのは本当です。〔それ〕は、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています」。イエスは、「あなたは、神の国から遠くない」とお答えになった。

## 塗油とゲッセマネの園（二四：一―七二）

さらにもう一カ所、「入る」という動詞が塊で出てくる場所がある——一四章に一二回出てくる。一人の女性が、皮膚病人のシモンの家にやって来て、葬りのためにイエスに油を注ぐ。イエスは葬りのために油を注いでくれた彼女の行為を誉めており、また無礼にも彼女を批判した人々に反対しているのである。

イエスは、最後の晚餐を祝う部屋の中に、弟子たちと共にやって来る。またイエスは、弟子たちと共に、ゲッセマネの園の中にやって来るが、イエスはそこで逮捕され、十字架に架けられるために連行されることになる。イエスは、自分が祈っている間、目を覚ましているようにと告げた弟子たちのもとに、三度やって来るが、弟子たちは眠っている。イエスは弟子の長であるペトロに対して、彼がイエスを知らないことになると告げる。そのとおり、ペトロは実際にイエスを三度知らないと言い、そして彼は恥じ入って、「いきなり泣き出した」（一四：六六―七二）。では、裏切り者はだれなのか。ユダは、ある人たちが詮索するように、ゼロテ党だとは言われていないし、またある人たちが示唆するように、守銭奴だとも言われていない。むしろ彼は、繰り返し「十二人の一人」だと言われている（二〇節および四三節）。このドラマにおいては、裏切り者はむしろ、弟子である私たちである。ユダは、弟子である私たちを代表しているのである。

イエスは、弟子たちがこうして失敗することを知っておられ、そのように彼らに告げておられた。十字架とは、神がキリストにおいて私たちのただ中に入ってくださり、私たちに対峙し、悔い改めるように呼びかけてくださり、そして、私たちの裏切りと否認とを、御自身の対峙する愛（*confrontive love*）の中に包含してくださる、ということである。

弟子たちの裏切り、否認、そして脱落は、イエスによつて、明白に十字架の意味の中へと取り上げられている。

イエスは弟子たちのことをよくご存知であつたと、マルコは私たちに語っている。弟子たちはしばしばイエスを誤解した。イエスは、誤解や否認、また裏切りさえも含めて、その彼らのただ中にお入りになった。イエスが失敗した弟子たちと直接、そして誠実に対峙してくださるによつて、彼らは、イエスが完全な弟子たちを贖うのではなく、恥と罪責を負う人々を贖う、ということを理解するようになる。イエスは、私たちのような人々を贖ってくださるのである。イエスは、弟子たちの失敗を受け入れ、それを御自身と共に十字架へと持つて行つてくださる。イエスは、その失敗が共同体を破壊することをお許しにならないし、彼らを排除なさらない。むしろ、彼らに対して二度も、先にガリラヤに行つてくださり、彼らとの共同体をなお維持してくださると告げている（一四・二八と一六・七）。

\* わたしは、ヨハネ福音書の中にある、弟子たちが獲れた魚を岸に引き上げる、あのクライマックスの場面が大好きである。ペトロがこの場面の前に最後に登場したエピソードでは、ペトロは炭火のもとでイエスを否認した（ヨハネ一八・一八、二五―二七）。この場面では、イエスが岸で炭火を用意して、再びペトロを迎えている（ヨハネ二二・九）。ペトロが三度イエスを否認したように、イエスはペトロに三度問いかける。「あなたは」わたしを愛するか。ペトロは、イエスを否認したことをひどく恥じ入っていた。イエスは、そのペトロの恥の中に入つてくださり、彼を、イエスの羊を飼う働きへの参与者として回復してくださったのである。ペトロの指導力が必要とされており、彼はなお、その共同体に参与する者であつた。

\* \* イエスは、外部の者を共同体の中に連れて来られる。無名の登場人物たち (minor characters) は、弟子たちが失敗したことを、イエスのために実行する。群衆は、イエスのもとに殺到し、その教えを熱心に受け取る。とはいえ、最後には、彼らも祭司長たちに煽動されて、イエスの十字架刑を叫び求めてしまう。弟子たちではなく、悪霊に取りつかれた息子の父親が、信仰を発揮する。食卓に着いていた者たちではなく、弟子の輪の部外者であつた女性が、イエスの葬りに先立ってイエスに油を注いだのであり、イエスは、福音が宣教されるどころではどこでも、この女性が記念されると



告げた。弟子の一人ではなく、異邦人であるキレネ人のシモンが、イエスの十字架を担いだ。「イエスは神の子であった、ユダヤ人のメシア以上のお方であることを理解し、告白した最初の人間は、十二人のひとりではなく、異邦人であるローマの百人隊長であった。イエスの体を引き取って埋葬したのは、アリマタヤのヨセフであった。……最後に、イエスが葬られた後で、イエスに香料を塗りに来て、イエスが復活されたとの知らせを受け取ったのは、弟子たちではなく、女性たちであった」<sup>(14)</sup>。

このゆえにこそ、イエスはエルサレムに行つて、政治的・経済的・宗教的権威者たちの現前に入つて行かれたのである。イエスは、彼らの不正義、権力による支配、分断された忠誠心、富の収奪、見捨てられた者たちの排除、そして彼らの暴力に対して、彼らと対決した。イエスは、それが神の御心であるので、彼らのところに入つて行き、彼らに悔い改めを呼びかけた。それが、実際に衝撃を与える仕方、悔い改めのメッセージを権力者たちのもとに届ける唯一の方法であり、また彼らの暴力と不正義を、悔い改めと変革の呼びかけの中に組み込む唯一の方法だったのである。

イエスは現実主義者であつたので、彼らが悔い改めるとは、少なくともその全員が悔い改めることは期待していなかった。しかし注目すべきことに、彼らが陥れるための質問を浴びせたときにも、イエスは常に、彼らが聖霊を認め、すべての命に勝る神の権威を認め、またモーセの権威を認めることになるような質問を投げ返して、彼らに答えている（マルコ一・二九―二二・二六）。それは、決断を余儀なくされる状況に彼らを追いやることで、彼らに神の権威への忠誠を認めさせるためであつた。それだから、一人の誠実な律法学者がイエスに重要な掟に関する質問をし、イエスの答えを認めたときに、イエスは彼に、「あなたは、神の国から遠くない」（マルコ一・二三・三四）とお答えになつたのである<sup>(15)</sup>。

イエスは権威者たちの存在の中へも、同情をもつて入って行かれたか？

権威者たちはエルサレムでイエスを十字架に架けることになるのだが、イエスがそのエルサレムの権威者たちの存在の中に入って行かれたのは、彼らに悔い改めを呼びかけることを求めていた神の御心を、イエスが成就した出来事であった、というように解釈することは、はたしてできるのだろうか。神の御子を十字架に架けるといふ、この最も強力な恐るべき不正義の示威は、多少なりとも権力を持つ私たちすべてに対して、悔い改めを呼びかける。それは、私たちが、侵害されている人々に反して暴力の側を支持し、自分よりも力のない人々を支配し、周辺へと追いやられた人々を排除し、貧しい人々から強欲にも奪い取り、イエスを裏切りまた否認し、見張りとしての責任を果たすことに失敗することに対して、悔い改めるように呼びかけるのである。

権威者たちに立ち向かいたい (confont) と考える人も、当然ながらいるだろう。福島原発を建設した者たちや、適切な仕方での災害に対処しなかった者たち、あるいはそもそも原子力に依存することを決断した者たち、また十分に節電を指導しなかった者たちに立ち向かいたいと考える人もいるだろう。私が言いたいのは、イエスは単に必要を抱えている人々の存在の中に入られるだけではなく、権威者たちに対しても立ち向かい、正義を要求される、ということである。

マルコが語っているように、イエスは、エルサレムの権威者たちがイエスを十字架に架けさせようと画策していることを重々承知の上で、なお彼らに立ち向かい、彼らに悔い改めを呼びかけるためにエルサレムに入られ、そこにいる権力者たちと権威者たちの存在の中に入られたのである。明らかに、十字架は、すべて抑圧する者、排除する者、強欲な

者、暴力を行う者、そしてイエスを否定し裏切る者の罪に対する裁きである。私たちは皆、ドラマの中で役割を担っているのである——かつて、そして今も。イエスは私たちの罪のために死んでくださった。したがって、イエスの死は、明らかに私たちの罪に対する裁きである。しかしそれはまた、イエスを裏切り、否認し、見捨てたあの弟子たちに対してそうであったように、エルサレムの権力者や権威者たちに対してさえ、またイエスを十字架に磔にしたローマ人たちに對してさえも、神の同情 (compassion: 憐れみ) だったのではないだろうか。

イエスは十字架の上からこう言われた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ二三・三四)。

イエスは弟子たちに言われた。「また、立って祈るとき、だれか、対して何か恨みに思うことがあれば、赦してあげなさい。そうすれば、あなたがたの天の父も、あなたがたの過ちを赦してください」(マルコ一・二五)。これは、「祭司長、律法学者、長老たち」を赦す、ということなのではないだろうか。

一五章は、ローマ人たちがイエスを十字架に磔にする場面であるが、その場面は、彼らと私たちの罪を明らかに示して裁くような仕方でも語られている。この裁きの場面において、私たちは皆、役割を担うのである——すなわち、ユダヤ人の権威者たち、異邦人の十字架刑執行人たち、イエスを裏切り、否認し、見捨てた弟子たち、である。しかしそこには、悔い改めのしるしもある——すなわち、イエスの十字架を担いだキレネ人シモン、「本当に、この人は神の子だった」と告白したローマ人の百人隊長、「勇気を出してピラトのところへ行き、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出た……、アリマタヤ出身で身分の高い議員ヨセフ……。この人も神の国を待ち望んでいた」〔新共同訳の語順を、NRSVに合わせて入れ替えた〕、そして、遠くから見守っていたが、しかし後には、イエスに塗油するために香料を持ってやって来た(エルコマイ) 婦人たちである。

十字架は、確かに罪に対する対決であり裁きである。しかし私は、十字架が、悔い改めと、神の国に近くあることに

対する憐れみ深い (compassionate) 祝福でもあつて、それは一人のローマ人百人隊長にさえ、一人のユダヤ最高法院の議員にさえ、一人の律法学者にさえ、そして遠く離れていたが、後にイエスのもとに来た女性の弟子たちに対してさえも、そうであるということ提案したい。イエスは、私たちの罪のために死んでくださった。それは、私たちが男性の弟子であろうが女性の弟子であろうが、あるいはローマ人の十字架刑執行人であろうが、エルサレムの権威者であろうが、変わらない。問題は、私たちがどのように応答するか、なのである。

### これこそ、私たちの恥の中に入り、不正義に立ち向かう方法

十字架とは、「古代後期に行われていた、最も恐ろしく、痛ましく、恥辱に満ちた処刑方法であつた。<sup>16</sup>」  
モルナ・フッカーは次のように書いている。

私たちは、……十字架が尊ばれる象徴となつている「私たちの」文化から、それが徹底的な名誉剥奪……を意味していた文化へと、私たち自身を移し替える必要がある。……もしも奴隷であれば、あるいは裏切り者か、ローマの敵対者であれば、その人が十字架の上で終わりを迎える可能性は、極めて高かつた。……十字架刑の犠牲者は、長時間におよぶ恐ろしく痛ましい死を味わうことになる。人間を裸で釘付けにするということは、——生きていようが死んでいようが——相手に被らせることのできる最大級の侮辱であつた。したがつて、十字架刑は、死刑と苦痛に満ちた拷問、そして徹底的な屈辱とを結合したものであつた。……ローマ帝国においては、それは第一義的に、奴隷に対する刑罰として使われた。十字架刑の脅威よつて、奴隷が

屈從するのである。……「ちようど、そう遠くない過去に、アメリカ合衆国においてリンチが果たしていたのと同じように」。さらに言えば、この野蛮な死は、犠牲者の体を裸で公衆の面前に晒すということも伴っていた——それは、最終的な、究極の名誉剥奪であった。<sup>1)</sup>

イエスは確かに、恥の中へと入ってくださった。最後の晚餐の中で、イエスは言われた。「はつきり言っておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい」(一四・二五)。十字架上で息を引き取るうとしているそのとき、そばにいた者が駆け寄って、酸味のあるぶどう酒を海綿に吸わせて「イエスに飲ませようとした。しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた」(二五・三六―三七)。はたしてこれは、イエスの十字架上の死が、同情をもって恥と苦しみの中に入り、また不正義を行う権力者たちや、イエスを裏切り否認した弟子たちに対する対決である一方で、同時に、神の国に入ることもあった、ということなのだろうか。マルコ福音書のクライマックスは復活ではない——復活は、はつきりと約束されているが、描写されていない。マルコ福音書のクライマックスは、十字架なのである。

マルコ福音書のイエスのドラマは、贖いのドラマである。なぜならそれは、私たちが——不正義の犠牲者である私たち、恥じ入る弟子である私たち、また罪責を負う権力者である私たちが——自分の防御装置によって恥のうちに隠れているときに、私たちの生のただ中に「来てくださった」、キリストにおける神の憐れみ深い (compassionate) 到来 (「ドラマ」) だからである。キリストは、私たちの逃避と否認、また敵意と暴力と支配の権力とに立ち向かってくださり、それらを御自身の上に引き受けてくださることによって、またそれらを隠されたまま、疎外されたままになさらないことによって、それらを克服してくださる。

さらにもう一つ加えるなら、私たちは皆、死を恐れており、とりわけ、交わりを持たないまま一人孤独に死ぬことを

恐れている。疎外と恥、暴力、死の恐れは、唯一、そのただ中に入り込んでそれらと対峙し、それらに触れることによつて、また私たちを神と他の人々の共同体の中へと携え入れることによつてのみ、癒すことができる。これこそ、十字架において、神がキリストにあつて成し遂げていくべきことである。これこそ、一ヨハネ四・一八が意味するところである——「完全な愛は恐れを締め出します」。

それだからこそ、私たちは“Overshadowed by His mighty love”（神の力ある愛の影に [Ironsides & Schuler]）と賛美し、“You are not alone”（あなたはひとりではない [Mavis Staples]）と賛美し、“Christ with me, Christ before me, Christ behind me, Christ in me”（キリストは私と共に、私の前に、私の背後に、私の内に [聖パトリックの祈り（胸当て）の詩]による：Shaun Davey, “The Deers Cry”）と賛美するのである。それはユルゲン・モルトマンがその著書『十字架につけられた神』において指し示したことであり、ミロスラウ・ヴォルフがその著書 *Exclusion and Embrace*（排除と包摂）において、北森嘉蔵がその著書『神の痛みの神学』において、そしてノーマン・クラウスがその著書 *Jesus Christ Our Lord*（我らの主イエス・キリスト）において指し示したことである。（訳注\*）

イエスがなされることにおいて神がなされることによつて、贖いが生じるのである。私たちは、イエスがなされることの中に、私たちに向かって私たちのうちで行動される聖霊として神を見、また神の御子として神を見るのである。イエスは、「見えない神の姿」（コロサイ一・一五）である。キリストにおいて私たちが経験する神は、私たちの苦しみの中に入り、私たちの恥、私たちの罪責、私たちが神から隠れ、神から引き離されている所に入ってください。神である。私たちは、神が、私たちの築いた隔ての壁を、受肉をもつて通り抜けてくださり、それによつて壊れた関係を癒してください、という経験をする。十字架とは、私たちが最悪の仕方でも神との関係性を排除し、神との間に暴力的な隔ての壁を打ち立てることである。神はキリストにあつて、まさにその十字架において、私たちが関係性を拒絶するその拒絶を乗り越けて私たちの中に入ってくださいるのであり、その関係を回復してくださいるのである。そのことによつて、私たちは、

もし信仰を持ち続けるならば、和解させていただき、神の臨在のうちに生きることができるようになる。したがって、私たちが行う最悪を通して、なお、神は関係を回復してくださる（コロサイ一・二二参照）。十字架は不正義の典型である。そしてイエスは、エルサレムに行き、その十字架に向かつて行くことによつて、私たちのあらゆる不正義の中の不正義そのものに立ち向かい、それを露わにしてください——すなわち、私たちの支配と暴力、また他者の排除と収奪である。キリストにあつて神は、不正義を公然と晒しものにし、それによつて不正義がどれほど恐ろしく間違つているかを私たちに対して明らかにされる。「キリスト」は、もろもろの支配と権威の武装を解除し、キリストの勝利の列に従えて、公然とさらしものになさいました」（コロサイ二・一五）。

### 共に同情的苦しみに入ることを呼びかける私たちへの招き

マルコ福音書と、イエスがその上で苦しんで死んだ十字架とは、私たちすべてに対して、福島原発事故の災害に苦しむ人々の苦しみの中に入るように呼びかける招きである。多くの日本人と他の国々の人々が、この災害の被害者を支援するために行動を起こしている。多くの人たちは、同情 (compassion) と共感 (empathy) を持ち、痛みを共有して、その人たち自身の痛み、苦しみ、また屈辱の経験のただ中に入っている。この同情こそ、私たちがマルコ福音書の最初から十字架そのものに至るまで、イエスのうちに見出すものである。私は、皆さんが行っていることを、心から深く励ましたいと思う。多くの人々の努力に対して、深い感謝を覚える。

マルコ福音書と、イエスがその上で苦しんで死んだ十字架とは、様々な種類のキリスト者が、同情と敬意をもつて他のキリスト者の存在の中に入り、共に一つの共同体となるように呼びかける招きでもある。それは、日本人の同胞たち

が恥と離別を克服するためのモデルとなるものである。私は、日本のキリスト者の皆さんが、この災害の被害者に対して、また同様にお互いに対しても、同情をもつて共に働き、互いに協力している姿に、深い感謝を覚える。

ここで、個人的なことをお話しすることをお許しいただきたい。私は少年時代に、父が戦争に行つて留守であったため、ひどく寂しい思いをしていた。しばらくの間、私たちは父が戦死したのだと思つていた。そのため、深い苦痛を味わつた。ところが、父は生還した。日本が降伏を表明した翌日、まだその降伏が正式に調印される前に、父と、その他三名の米国海軍兵士は一台のジープに乗つて、日本にあるすべての戦争捕虜収容所へ出かけて行き、彼らを解放し、病人たちを東京湾に停泊している医療船に移送した。そこで父は、日本の人々が経験した多くの恐ろしい破壊を目の当たりにした。父が家に戻つて来たとき、彼は私に言つた。「グレン、戦争は恐ろしいものだ。だから私たちは、あらゆる手を尽くして第三次世界大戦を防いで、二度と原子爆弾が使われないようにしなければならぬ」。父は、国際連合の創立者の一人となり、米国政府の中に軍備管理軍縮局 (Arms Control and Disarmament Agency) をスタートさせた。多くの日本人がそうしたのと同様に、父はその生涯を平和づくりに捧げた。私は皆さんに心から感謝したい。

また私は、少年時代に広島と長崎の原爆のことを知つて、深い衝撃を受けた。私は年若かつたが、それでも、この二つの都市の人々と共に苦しんだ。原子爆弾が、世界中の他の国々にも拡散していくような思いに囚われ、戦争による巨大なキノコ雲が世界全体を覆つてしまうような思いに囚われた。それで私は、キリスト者がそれぞれ自分たちの教会を、イエスに従い、正義の平和づくりを支持し、二度と同じ戦慄すべき惨劇を繰り返さないために働く教会にするように力づけようと、自分の生涯を捧げた。

私は、自分の国が広島（と長崎）、そして日本の皆さんに対して、あのようなことを行つたことについて、深く恥じ入り、お詫びを申し上げたい。私の母国には、イエスが十字架において私たちにお与えくださった、あの同情、対決、そして悔い改めへの招きが必要なのである。私は、皆さんが寛大にも、再び来日するように私をお招きくださり、皆さ



んが福島事故の災害からの復興に尽力し、再びこのような災害が繰り返されないために行動を起こしている、その同情に満ちた努力に、このように私を参加させてくださったことに対して、心から感謝を申し上げます。皆さんがホアン・マルティネスと私をお招きくださり、癒しの働きに参加させてくださったことと併せて、皆さんが福島原発事故以降の癒しの働きに、教会的伝統の異なる日本のキリスト者の仲間を招いていくくださることに対しても、心から感謝を申し上げます。

## 付論・受肉論的十字架論

イザヤ書五三章は、「彼は軽蔑され、人々に (by others) 見捨てられ」た、と語る(三節)。ここで彼を軽蔑し、見捨てたのは、イスラエルの権威者たち、ローマの権威者たち、そして弟子たちであって、神ではない。「彼が担ったのはわたしたちの病／……であつたのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と」(四節)。実際には、彼を打ちのめしたのは人々であつたにもかかわらず、私たちは、彼が神に打ちのめされたと考えるという過ちを犯していたのである。彼が引き受けた苦しみは、私たちの罪、私たちの暴力、そして私たちの神に対する不信仰が引き起こしたものであつた。「正義がねじ曲げられて、彼は取り去られた」(八節)(NRSV)

からの訳」。マルコ福音書において、正義をねじ曲げているのは、人間の権威者たちまた弟子たちであって、神ではない。神は不正義を行わないのである。しかし、「痛みによって彼を砕こうとされたのは、主の御心であった」（二〇節）〔NRSVからの訳〕。私は、この聖書箇所を提示することによって、権威者たちや弟子たちは過ちを犯したが、神はその過ちを用いて、私たちに贖いをもたらしてくださった、ということをお願いするのである。

私は、エルサレムの聖墳墓教会を訪れて、イエスの十字架を描いた二点の絵画を深く思い巡らしているうちに、「イエスは私たちのために死んでくださった」ということが、イエスは私たちの罪のゆえに死んだ、すなわち、私たちの罪がイエスの死をもたらした、という意味であると信じるように突き動かされた。それはまた、イエスの死によって、私たちに赦しを提供し、悔い改めへと招くものとして、神が私たちのもとに存在するようになってくださった、ということをも意味している。そしてこの招きは、イエスの死後も、イエスの弟子たちを通して続いているのである。またそれは、イエスがその死によって、同情 (compassion) をもって、防衛装置と否認の障壁を突き抜けて、私たちの恥と罪責と疎外の生の中に入ってくださった、ということをも意味している。イエスは、私たちの罪のために死んでくださったのである。

私たちは、自らの罪と罪責と恥の中で、ねじ曲げ、誤認する。また私たちは否定し、誤解する。強欲を実践する。排除する。私たちは支配し、不正義を行い、暴力を行う。そうすると、私たちは隠れ、逃れ、まるでしなかったかのように見せかける。イエスは、私たちがそうしなかったかのように見せかけてくださるのではない。そのことと対峙 (confront) してくださるのである。イエスは、安価な赦しを与えることはなさらない。私たちが隠れているそのただ中にお入りになり、私たちの罪の破滅性を御自身の上に引き受けてくださる。イエスは私たちが、御自身に参与する者としてくださるのである。イエスは、私たちの過ちの深さを軽く見ておられるのではない。むしろ、御自身の受肉の愛のゆえに、そして私たちが悔い改めへと招くために、その代価を支払ってくださるのである。

罪とは、神の臨在 (presence) と信頼性との回避 (evasion) である。人々を罪から贖うために、神はそのただ中にお入りくださり、それによって私たちの回避を切り裂いてくださる。また罪とは、受肉の弟子づくりという神の方法に対する疑いであり、回避でもある。私たちが神と神の方法を回避するときには、私たちは不可避免的に、なんらかの代替神 (God-substitute) を採用し、その方法に従うことになる。私たちは、その代替神の重要性によって自らの偶像崇拜的な生活様式を確保しているので、その代替神を守ろうとする衝動に駆られてしまう。罪から贖うために、神はその本質が回避であり、疑いであり、不従順であり、また偶像崇拜であることを暴いて (reveal) くださる。罪はまた、権力と支配と強欲への誘惑でもある。私たちが罪から贖うために、イエスは権威者たち、支配者たち、強欲な者たちに立ち向かってくださり、彼ら (私たち) がイエスを十字架に架けたときに、その悪をドラマティックに暴いてくださった。十字架とは、神の御子を十字架刑で処刑することであり、私たちが成し得る最悪の行為である。この一つの出来事の中に含まれているのは、暴力であり、憎悪であり、排除であり、支配であり、権力や富みに対する強欲であり、また回避である。神は、このすべてを神御自身の生に引き取ってください、なお憐れみ (compassion) をもって私たちの生の中に入って、私たちのもとに存在してください、私たちが御自身の共同体に参与する者としてくださるのである。贖いは、このように生じるのである。

私たちが神を回避するとき、防御的になり、恥じ入り、そして——時には怒りと暴力によって——自らの防御と回避を擁護しようとする。私たちは、神に私たちの隠れているただ中に入っていただき、関係を回復していただくことによつて、その衝動的な防御を突き崩していただく必要がある。十字架とは、神がまさにその防御、すなわち、支配し、排除し、抑圧し、暴力的な防御、神の御子さえも否認し、裏切り、拒絶する防御のただ中に入ってくださいることなのである。十字架とは、私たちに對するキリストにおける神の臨在であつて、それは私たちの強欲と暴力の中にさえも入ってくださいるものである。それは、しばしば殺害という暴力や神の憐れみ (compassion) の拒絶に至るような、私たち

の最悪な状態であるときにさえ、私たちが赦す行為である。十字架は、悔い改めへの呼びかけであり、神の宣教への受容と参与を提供するものである。十字架は、神の臨在を明らかにし、神の共同体へと私たちが招くものである。しかし、私たちはなお、私たちがふたたび不従順になり、不信の念を抱き、敵対的になってしまっているのではないかと恐れる。神を信頼することを恐れるのである。それゆえに、私たちは、神が私たちの敵意を十字架において引き受けてくださることが必要であり、また「それによつて」、「神による」臨在と編入の提供が、私たちの敵意によつて無効になることはない、ということを示していただく必要がある。「わたしは……、あなたがたより先にガリラヤへ行く」（マルコ一四・二八）。わたしはあなたがたを見捨てない、ということなのである。

もしも受肉が本当に、まだ私たちが神の敵であったときに神が私たちの生にお入りくださった、ということであるならば（ローマ書五章）、排除された人々の生に受肉論的に入り、その人々を共同体の中に回復させるというテーマが、十字架にとつて中心的でなければならぬ。イエスの聖性 (holiness) は、外部の人々からの分離 (separation) において見られるものではなく、その人々を共同体へと招き入れる、救贖的同情 (redemptive compassion) においてこそ見られるものである。「敵を愛しなさい」とのイエスの中心的教えは、単なる感情ではなく、他者の視点の中に入り、他者を共同体に招き入れることなのである。イエスの十字架は権威者たちの怒りの結果であるが、それは、見捨てられた人々の必要の中に入り、彼らを共同体の中に招き入れたイエスの同情的介入 (compassionate entry) に対する怒りであり、また、イエスが彼らの「神殿」境内に入り込み、彼らに悔い改めを迫ったことに対する怒りだったのである。

## 注

- (1) 以下の考察は、近々出版される以下の著書において私が述べていることの一部分である。 *A Thicker Jesus: Incarnational Discipleship in A Secular Age* (Louisville, KY: Westminster John Knox Press, 2012).
- (2) N.T. Wright, "The Cross and the Caricatures: A Response to Robert Jenson, Jeffrey John, and a New Volume Entitled *Pierced for Our Transgressions*," (on-line article; Fulcrum, 2007 [http://www.fulcrum-anglican.org.uk/?205]). \*וִּיבִיט\* Joel B. Green and Mark D. Baker, *Recovering the Scandal of the Cross: Atonement in New Testament and Contemporary Contexts* (Downers Grove: IVP, 2000), 27-31 他多数を参照。
- (3) マルコ福音書は、神の子としてのイエスのアイデンティティーが何を意味するかを、次第に明らかにしていく。これがマルコ福音書のキリスト論の焦点でもある。 Craig Evans, *Mark 8:27-16:20*, WBC (Nashville: Thomas Nelson, 2001), lxxi-lxxii. 「……ほとんどの学者が一致していることだが、この『神の子』という称号こそ、イエスの最も重要な称号である」 W.R. Telford, *The Theology of the Gospel of Mark* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999), 38.
- (4) マルコ福音書の冒頭の意義についての示唆に富む議論として、 Rikki Watts, *Isaiah's New Exodus in Mark* (Grand Rapids: Baker Academic, 2000) 第三章と第四章を参照。
- (5) この動詞は、マルコ福音書に八二回登場する。マタイもルカも、マルコの強調を踏襲しており、マタイには一〇八回、ルカには九七回出てくる。ヨハネ福音書はこの動詞を一四二回使っている。これは福音書の特別な強調であって、パウロ自身の手紙とパウロ系列の手紙では、全体を合わせても六九回の使用である。
- (6) Watts, *Isaiah's New Exodus in Mark*, 323-24.
- (7) 同書、一五五頁。
- (8) Ched Myers, *Binding the Strong Man: A Political Reading of Mark's Story of Jesus* (Maryknoll: Orbis, 1988), 393.

- (9) マルコ福音書では、神への愛と隣人への愛の大なる掟についてのイエスの教えを肯定した律法学者についても、イエスは賞賛している。「あなたは、神の国から遠くない」(一一:三四)。イエスは、律法学者たちのためにも、会堂長たちのためにも、死んでくださったのではないだろうか。
- (10) Ched Myers, *Binding the Strong Man*, 134 を参照。この部分の着想について、エリン・デュフォルト・ハンター氏に感謝する。
- (11) 同書、一四七頁。
- (12) Tae Ho Lee, "Jesus, Social Justice, and the Reform of Chaebols," Ph.D. dissertation, Fuller Theological Seminary (Pasadena, CA, 2006).
- (13) 「マルコの語りは、イエスの道に対する共同体の忠誠が崩壊していくことにおいて、弟子たち一人一人——ペトロやユダだけではなく——の共犯性を強調する」。Ched Myers, *Binding the Strong Man*, 365.
- (14) Telford, *Theology of the Gospel of Mark*, 134.
- (15) 私は頻繁にマイヤーズの著書から引用しているが、それはマイヤーズの考察が極めて洞察に富んでいるからである。すなわちマイヤーズは、十字架のドラマを、その現実の歴史の中に効果的に位置づけているのであり、また、ラディカルな受肉の弟子づくりのテーマを中心に据えているのである。ただし、マイヤーズの紛争社会理論 (conflict social theory) と「私自身のより多元主義的な理論——それも紛争に関わるのだが——とは、この点について異なる見方をしている。Myers, 317-8 を参照。
- (16) Evans, *Mark 8:27-16:20*, 511.
- (17) Morna D. Hooker, *Not Ashamed of the Gospel: New Testament Interpretations of the Death of Christ* (Carlisle, UK: Paternoster, 1994), 8-12, 15. Green and Baker, 192-209 を参照。

## 訳注

- \* Jürgen Moltmann, *The Crucified God: The Cross of Christ As the Foundation and Criticism of Christian Theology* (New York: Harper & Row, 1974); 邦訳は、J・モルトマン『十字架につけられた神』喜多川信他訳（新教出版社、一九七六年）。
- Miroslav Volf, *Exclusion and Embrace: A Theological Exploration of Identity, Otherness, and Reconciliation* (Nashville: Abingdon, 1996)。北森嘉蔵『神の痛みの神学』（新教出版社、一九四六年／講談社、一九七二年／教文館、二〇〇九年）。C. Norman Kraus, *Jesus Christ Our Lord: Christology from a Disciple's Perspective* (Scottsdale, Pa: Herald, 1987); 日本語版は、C・ノーマン・クラウス『しもへとなつた王——弟子たちのキリスト論』棚瀬多喜雄訳（新教出版社、一九八七年）。